

Title	歴史と言語学
Sub Title	
Author	村田, 岩次郎
Publisher	三田学会
Publication year	1910
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.3, No.6 (1910. 6) ,p.759(131)- 761(133)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	雑録
Genre	Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19100615-0131

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

し且つ價值のある藝術といふものは生物學上にも社會的にも頗る大なる力のあるものであることはコンラード、ランゲ氏が最も簡潔に言ひ現して居る。即ち曰く

『人間の眞面目な活動行爲は多少一方に偏した性質を有してゐるものである。其生活はシラーが美的教育を論じた書簡にいつた通り仕事と感覺的快樂との浮沈である。人間の職業に於ては一般に精神力の或種のもののみが用ひられ隨て一方に偏してゐる。幾多の感情は之れを發露し試むるの機會なく徒らに胸底に埋められてゐる。故に若し藝術のあるありて此鬱積せる感情に刺戟を與へ以て之を發解せしむることがなかつたならば其の人類に不幸なる結果を齎らすことは言はずして明瞭である。されば藝術は人間が假りに自己を詐りて(意識的自己幻想)自己及他人を樂しましめる爲に人間に具つてゐる能力である、而して此自己幻想は人間の直觀力と情緒とを擴く且深くすることによりて種族を保持し

改善せしむる役をなすものである。』
シラーの云ふた有名な「人は遊ぶ時に於てのみ全き人間である」といふ言葉は茲に始めて生物學的の意義を帯びて來る。

以上はグロウス氏の探つた生物學上の見地から見た遊戯説である。而して今日の處此れより包括的な説明を聽かぬ。

最後に遊戯を心理學、社會學、教育學上から見るの興味があらう。特に美學とは關係が深いから別に之を論ずることとしやう。茲に一先づ筆を擱く(完)

「生理的説明」の章の重なる正誤
夏及行 誤
四八〇ノ四 實境 寢境
同 ノ六 速戯 遊戯
四八二ノ二段十五 特有及 特有の
四八四ノ二段十二 遊戯の下に 「説」を入る
同 十四 「興奮され」の下に「た」を入る
四八六ノ一段十九 課業の様 後
四八八ノ一段ノ二 不意的を 不隨意的とす
四九〇一段ノ五 主要ある なる
四八二ノ二段の一 意義なる 一ある

歴史と言語學

村田岩次郎

各種の科學夫れ／＼固有の目的を有し特殊の研究對象自ら存す可しと雖も又科學夫自體の間に於て或は根本的に或は補助的に或は直接に或は間接に相關聯して互に其の發達進歩を誘導促進するの相關的作用あり、然も此作用ある爲めに各科學の領域必しも常に明確に分別せらるゝことなく時には全く交錯して科學の境界極めて曖昧なることあり、余は茲に歴史と言語學と題したりと雖も自ら多くを語るにあらず唯夫れクルーグ氏の *Vierteljahrsschrift für Social. u. Wirtschaftsgeschichte* 第六卷に載せたる *Sippeniedelungen. u. Suppennamen* の二部の大意を記して以て言語學の歴史上に於ける意義の一斑を窺はん而已

言語學が既往に於て史的研究に資したる所敢て少小なりと云ふ可からず否、歴史の範圍に於ける幾多の新研究は言語學上の基礎の上に立てられた

り、地名にして人名と相通するもの例之カル、スルーエ (*Karlsruhe*)、ルードウイヒスハイフェン (*Ludwigshafen*)、フリードリッヒスローダ (*Friedrichroda*)、ペテルスブルグ (*Petersburg*)、クリスチアニア (*Christiana*) の如きに想倒する時は自から史的聯想を抑へんとして抑ふる能はざるなり、殊に個々の地方に關し特殊の研究を爲さんとするものに取りては古き典型的地名を知るは必要の事なり、何となれば比較的近代に開かれたる地域の植民的歴史は地名の容易に説明する所なれば也語尾に *-ing* を帶ぶる地名は第五六世紀に於けるゲルマン種族植民の歴史的研究に資する所大なり、從來の歴史家專擅の舞臺は今や一部言語學者の占領する所となれるなり、何となれば言語構成學は獨逸文法上至要の部分にして又典型的地名に見らるる *-ing* を帶ぶる族名の行はれたるを古代に於て甚だ顯著なるものあればなり、言語學者はメロビンガ (*Merovingi*)、カロリング (*Carolingi*)、アギロルフィンガ (*Agilolfingi*) の如き族名の構成とイーリ

ンゲン(Thringen)、ゲツフインゲン、(Göthingen)の如き地名の構成とは其の根本的關係を一にするや否やを解決するの責任を有するものなり。

古代獨逸の典型的族名はアギロルフインギ、ハヒリンガなりこの點に關して最古の證據を供給せる「Lex Bavariorum」によりて知らる、又英吉利の(P. J. Sim)叙事詩より二三王族の典型的族名を得、即ちウエグムンチガス、はレトリンガス王家及び同代のハイゲリツクと同族たる貴族なり、又同資料に丁抹スキルデンガス王朝、瑞典のスキルフインガス朝等の名を見る、佛蘭西のメロピンが王朝時代には東ゴート人の間に中南方獨逸語の史詩にアメルングと稱せる王族ありきヴェダの古代英國敎會史にケントのエスキング朝並ニ東アングリアのウルフインガス朝の名あり、又パウルスチアコヌス Panu sPiaconus のランゴバルド史にラゴンゴルドのソトリンギ朝あり、彼と同代のアインハルトはカル、大帝の後裔をカロリンガと云へり、又此王族々名の典型は古代スカンヂナビアの

口牌中にも屢々見る所なり。

斯く列擧したる所すべて王族の族名なり、然も余は茲に相應の資料を擧示したる者なれば以て典型的族名が如何に高貴の家族殊に王族に限らるゝやを可知きなり、是れ敢て民族遷移時代に於ける自由なる獨逸人が一の固有の族名を有する一族に屬したりとの證據となるものにあらず一族の者は名の頭字を等うせしめて以て同族の結合を表明せんとしたり、例へばヒルデブランドの古詩に於ける Heribrant Holibrant, Hadubrant の如き又 Lex Brungundionum に於ける Gibica, Gundahrimis, Godomares, Gislahrimis 等の如き是也頭字等一こそは固有の族名を失ひたる場合に於ける同族的結合の有力なる徵表たりしなれ。

由是觀之エスリンゲン、ツットリンゲン、ロイトリンゲン。ヘヒリンゲン、エツトリンゲン、レツフインゲンの如き地名と族名構成との關係は容易に之を了解し得べし。而も決して此關係を偏重視することある可からず、地名がゲルマンの人名に

基けるをを知り得可き場合は例外なり。抑も民族遷移時代に於けるケンマンの人名中には、一二語より成れる者少なからず例へば sigfrid は sigi (sieg) と fridu (Friede) とより Guntheri は sigid (kamp) と heri (Heer) とより Hadubrant は hadu (kamp) と brant (schwert) とより Diotrich は Diot と nih とより成れる等なり。然るに二語より成れる人名に基き而して sigi を帶ぶる地名の數は極めて僅少なり、ワルテルスハウゼン、グンテルスハウゼン、ウオルフラムスハウゼン、ヒルドブルグハウゼン、アルブレヒトハウゼン、ルドルフスハウゼン、ラドルフスハウゼン、ウオルブランズハウゼン、ウオルブレヒツハウゼン、リツポルズハウゼン、シーボルツハウゼン、の如き古地名は存するも sigi を語底とし而して二語より成れる人名に基ける地名は少し又ヘルマンフイッシャヤが其の原語を以て不可解となせしチユウレンゲンの如き名辭の言語學上の意義如何の如き之が解決は寔に至難の事に屬す。

新 著 批 評

- O. Most: Die Schuldenwirtschaft der deutschen Städte. Jena 1909.
- F. Zadow: Der ausserordentliche Finanzbedarf der Städte. Jena 1909.

往時の財政學に關する著述は只中央政府の財政を論ずるに過ぎざりしが、近來の著書は地方財政をも併はせて論ずるもの少なからず、特に Richard Kaufmann が一九〇六年 Frankenstein-Heckel の叢書中に Die Kommunal Finanzen (地方財政論) と題して、約九百頁の大冊を出版し、英、佛、普の地方財政に關する、比較研究の結果を公にせるが如きは、以て如何に近來此種の研究が重要視せらるゝに至れるかを證するに足らん。

地方財政中都市財政の研究は、最も興味ある事